

## 第 2 回：人生 100 年時代の音楽家の生き方と働き方

音楽学者 久保田慶一

### 1. 人生 100 年時代とは

「人生 100 年時代」というフレーズは、2019 年でもう少々使い古された感がある。もともとは、ロンドン・ビジネススクールでともに教鞭をとるリンダ・グラットン(1955-)とアンドリュー・スコット(1965-)が 2016 年に出版し、世界中でベストセラーになった『ライフシフト 100 年時代の人生戦略』(東洋経済新聞社) 原題は "The 100-Year Life: Living and Working in an Age of Longevity" の題名に由来する。ふたりの予測では、2107 年には 今年 2019 年に生まれた人が 88 歳になる年には、先進国では 50% 以上の人 が 100 歳以上生存しているという。

長く生きれば生きるほど、運・不運に左右されるリスクは長期間に及ぶ。現代の日本社会のような「リスク社会」<sup>1)</sup> それは荒海に形容できるであろう に船で漕ぎ出す若者には、せめて海図 コンパスや方位磁石 を持って、ライフジャケットを装着してもらいたいと思う。

キャリア・デザインは、海図を見ながら航路を決めることに似ている。目的地は同じでも、人によって航路は違っていい。行く手に岩礁が見えれば、手前で舵をきればいいし、嵐が近づいてくるようなら、迂回してもいい。航海を続けるにあたって、岩礁や浅瀬の位置を事前に確認しておく、天気予報もこまめにチェックする必要があるのは当然だ。

大学を卒業して社会に出てからの人生は、およそ半世紀近くの時間に相当する。社会に出てからの人生という海は、ときに静かだったり、ときに荒れ狂ったりする。そして半世紀にわたって、人はオールを漕ぎ続けなくてはならないのだ。

### 2. ライフ・ステージの細分化

海図を見て自分の航路を選択するように、自分のキャリアをデザインするうえで大切となるのが、「ライフ・ステージ」である。ライフ・ステージとは、人の精神的発達、とりわけ社会と関係する心理学的な発達の度合いに従った人生の時期である。例えば、エリクソン<sup>2)</sup>の理論で言えば、モラトリアムを特徴とする「青年期」などが、ライフ・ステージである。

「ライフ・スタイル」が意味する人生観や価値観をきちんと理解して、自分の判断で選択できること、さらに自分が今どのようなライフ・ステージにいるのかという客観的な理解、つまり、今後の成長にとってすでに何が達成できていて、また何が達成できていないのかという自己理解が、キャリアをデザインするうえで重要なのだ。

生涯学習<sup>3)</sup>という言葉も当たり前となり、大学を卒業してから、働きながら再度大学に入学したり、さらに退職してから大学に再入学したりという人も多くなった。現在の職業で必要になったことを学んだり、あるいはかつて勉強したかったが、定年後にようやく学ぶことができるようになったりという人たちである。20歳頃の大学での学びがその後の人生を決定づけるように、仕事に就いているときや定年後の学びも、人生を変える、つまり、キャリア・チェンジの機会となり、また原動力になるのだ。その人の現在の職業における成長だけでなく、新しい分野での職業人として成長を促すわけだ。インターネットの発達によって、「E-ラーニング」が可能になったことで、大学という場所を離れた学習が容易になったことも、成人の新しい学びを後押ししている。

こうした形で、教育を受ける時期が、1年、あるいは2年という短い期間で、ライフ・ステージの各ステージに挿入されてくるのが、人生100年時代の学びの特徴である。教育・労働・余生というかつての3つのライフ・ステージは、短期の教育期が断続的に挿入されることで、細分化されていくことになる。「ライフシフト」の著者は、短い周期で挿入される教育期を「探索期」、そこにいる人は「エクスプローラーexplorer」と呼んでいる。将来の新しい仕事につながる資質を磨き、また自己の隠された能力を探索していくのである。

### 3．キャリアの発達と移行

キャリアが成長すると言っても、上位の学校に入学したり、会社で出世したりすることではない。人は身体的な発達と同時に、教育や他人との関わりから精神的にも社会的にも発達する。そしてこれらの発達を通して、社会と自分との位置づけを客観的に理解し、とりわけ職業選択や職業における活動を通して、自分のこれまでの人生に意義を見出し、さらに将来を見通して将来をデザインする能力を高めていく。これが人のキャリアは成長するという意味であり、一般的に「キャリア発達」と呼ばれている。

キャリア発達では、人前のステージで達成しておくべきことを、達成しないまま進んでしまうと、何らかの困難を生じてしまう。従ってそれぞれのステージはそこで求められている課題をいかにうまく達成するかが重要となる。理想的には、この課題の達成度を確かめたうえで、次のステージや段階に至るのがよいのだが、ここには難しい問題がある。

ひとつは、課題の達成度を確かめることが難しいことである。質問紙を用いて「キャリア発達度」などを測定することもできるかもしれないが、それとて「自己診断」であって、客観的な指標とはならない。もうひとつの難しさは、個人のキャリア発達の度合いと社会制度などの社会環境とが、必ずしも一致しないということだ。高校生は3月末に卒業して、数週間すると大学生になる。しかし高校生と大学生とでは、社会から求められる役割も大きく違っており、内面的に見る学童期の課題を達成して、青年期を迎える状態になっているわけではないのである。

キャリア発達において重要となるのが、前のステージから次のステージへの「移行」である理由がここにある。キャリアの発達を河川に喩えれば、移行は「滝」である。これをどのように乗り切っていくのかが、次のステージに移行するときの課題ともなるだろう。

この「移行」の時期に、一般的には、精神的に不安定になり、また苦勞したりするものである。このような困難を軽減して、スムーズにライフ・ステージへの移行を促すのが、「幼小連

携」<sup>4)</sup>、「小中一貫教育」、「中高一貫教育」、大学では初年次教育<sup>5)</sup>であったり、インターンシップであったりする。近年、文部科学省が提唱している政策の多くが、キャリアの移行という問題に関連しているのは興味深い。

#### 4．多様な働き方と学び方

ライフ・ステージが短い期間で交替すると同時に、もうひとつ特徴的なのが、各ステージの働き方である。ひとつの仕事に就いていたわけではなく、複数の働き方や仕事が併存することにもなる。これまで日本では「副業」を禁止する企業が多く、何らかの理由がない限り、ひとつの仕事で生計を立てるのが一般的であったが、現代の日本では副業を認める企業も増加し、若い世代の人は積極的に「やむにやまれぬ理由からではなく」、複数の仕事を組み合わせ、自分の職業人生を紡ぐことになる。

自分のもっている複数の資質・能力を活かして、職業生活を送ることを、「ポートフォリオ・キャリア」と呼ぶ。自分の資質・能力を複数の活動に向けることは、フリーランスで活動する音楽家ではごく普通に行われている。1週間の労働時間40時間 実際にはもっと長いと思われるが、10時間は生活費のための仕事、10時間は楽器店での講師、10時間は学校での非常勤講師、10時間は演奏活動というように、時間を配分している。これは、その人が音楽家としての、あるいは社会人としての多彩な職業能力をもっていることの現れである。自分は音楽しかできない、ピアノしか弾けないと思うべきではない。ひょっとしたらデザインが得意かもしれない。そうなれば、友人たちの演奏会のチラシのデザインを副業のひとつにしてみてもどうだろうか。

実際に複数の仕事(ジョブ)を組み合わせることを、L.グラットンとA.スコットは「ポートフォリオ・ワーク」と呼んでいる。ポートフォリオ・キャリアとは、原因と結果のような関係になっているわけである。現代社会に生きる人々にとっては、さまざまな能力をもち、それらの配分を考えて、キャリア形成をしていくことが、よりよく生きる条件となっていると言っても過言ではないだろう。

L.グラットンとA.スコットは、「エクスプローラー」との関連で、「インディペンデント・プロデューサー」という職業を挙げている。日本で言えば「個人事業主(者)」である。企業などに雇用されずに、自らの資質・能力を活かして仕事をする人たちである。フリーランスで働く人も「インディペンデント・プロデューサー」と呼べそうであるが、ここで強調されているのは「プロデュース」すること、つまり創造性であり、新しいビジネスを創造する革新性である。成功をもたらすモデルや、こうすれば必ずうまくいくという方法などはない。むしろ自分で新しいビジネスを考えて「起業」<sup>6)</sup>するという、「起業家精神」を培うことも、今まさに急務になっているのもそのためである。

ものの見方や学習方法を変えることで、これまで獲得した知識や能力をリセットすることで、新しいビジネスを創出できる下地にはなるだろう。これまで自分が持っていた知識が陳腐に感じたり、役に立たなくなったりと思ったりすれば、むしろ積極的にこれまでの知識を一度「捨て去って」、新たに知識を獲得して、知識を再構成していくことである。このような学習方法は「アンラーニング unlearning」と呼ばれている。「学びなおし」「学びほぐし」と訳される。

アンラーニングを継続していくと、人の知識はどんどん更新することができる。人は一生を

通して、学習を継続することになり、これが「生涯学習 life-long learning」へと発展していく。「生涯学習」という言葉はすでに使い古された感もあるが、その理念は人の成長にとって不可欠なものなのである。

近年では、とりわけICTの進歩が著しく、インターネットの発達によって、私たちが修得できる、あるいは修得すべき知識の量は格段に増えている。またその変化も激しく、5年前に学修したことがすぐさま時代遅れのものになってしまう。また近い将来、多くの職業がコンピュータや人工知能(AI=Artificial Intelligence)によって取って代わられると言われている。スマホなどの新しい機種を追いかけるのではなく、学習態度そのものを見直していく方がよいたやすく、新しい時代に適応できるのかもしれない。

註)

1)「リスク社会」は、ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベック(1944-2015)に由来する。ベックは自然や社会に存在するリスクのみならず、個人の人生やアイデンティティ形成のリスク、さらにグローバル社会のリスクを指摘して、現代の社会を「リスク社会」と呼んだ。リスク社会に関するベックの著書には、『危険社会』(法政大学出版局、1998年)、『世界リスク社会論 テロ、戦争、自然破壊』(筑摩書房、2010年)、『世界リスク社会』(法政大学出版局、2014年)などがある。

2)エリク・エリクソン(1902-94)はアメリカの社会心理学者。「アイデンティティ(自己同一性)」という概念を提唱してことで有名。

3)生涯学習とは、人は義務教育の時期に学ぶだけでなく、生涯、学び続ける存在であるという考え。就職してからの学びや退職後の学びなど、現代の日本社会には、成人教育、社会教育、リカレント教育など、さまざまな学びの機会が提供されている。

4)「幼小連携」とは、本来は幼稚園と小学校の連携であるが、現在では、幼児教育と小学校教育との連携と理解されている。幼児教育は、幼稚園のみならず、保育所、認定こども園でも行われているからである。幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定子ども園教育・保育要領が改訂され、小学校教育との連続性が担保され、今後、子どもたちが小学校での教育や生活になじめるように、幼児教育と小学校教育の連携が求められるであろう。

5)「初年次教育」とは、特に大学において、大学での学修や生活に慣れるために、新入生を対象に行われる教育のこと。数日から数週間、あるいは1年次前期にわたって行われる場合がある。かつては「リメディアル教育」とも呼んでいたが、これは大学での学修ができない学生や学習の遅れた生徒に対して行う補修教育、あるいは治療教育のことであることから、近年キャリア教育上の目的が強調されたことから、初年次教育と言われるようになったと思われる。

6)起業とは、新しく事業(ビジネス)を起こすこと。既存のものではない、新しい領域や方法で起業が求められる。フランス語では「アントルプルヌール」、英語では「エンタープライズ」だが、最近では「スタートアップ」と呼ばれる。